

そんな帝人を臨也はにこにこ笑顔で眺めている。まるでそんな帝人の反応を楽しむように。

「そんなの、わざわざ実行しなくても簡単に想像できるでしょう？」

「想像は想像だよ、帝人君。それは事実じゃない。俺は人間の偶像を愛してるわけじゃないからね。ちゃんと事実を見届けたい」

それは屁理屈だ。けれど反論するだけ無駄なのだろう。帝人には良く理解できないけれど、少なくともそれは臨也の中では正論であるに違いない。どうなるのか、と彼は疑問を持ち、本物の人間を使って実験したくなった、つまりはそういうことだ。

彼の好奇心を満たすため、臨也はその標的になぜか帝人を選んだ。これはおそらく非常に嬉しくないことに彼の中ですでに決定事項で、だからこうして帝人に声をかけたのだろう。きつと、たぶん。

帝人を選んだ理由は不明だが、女性が相手ではきつと簡単に臨也に恋してしまう、とでも考えたのではなからうか。だから同性の、それもある程度は臨也の性格の悪さを知っている帝人を選んだのかもしれない、とぼんやりと考える。たぶん同じ条件に当てはまっていれば、たとえば正臣でも良く、けれど自分の方がたまたま連絡が取りやすかったとか、扱いやすいとか、そんな風に思ったのかもしれない。

「バイト代ははずむよ。今、結構厳しいよね？」

「何で知ってるんですか？」

図星だ。悲しいほどに図星だった。確かに、非常に今現在、帝人の生活は厳しい。

「……バイト代、ついてくらですか？」

聞く気はあまりなかったが一応聞くだけ聞こう、とバイト代を尋ねると、予想外の金額を臨也は口にする。帝人の感覚からすると、それは確かに良かった。良すぎるくらいに。

「食事代も交通費も全部デート代は俺が出すし悪くない話じゃないかなあ？」

にこにこ、邪気のない笑顔で臨也は言う。

（確かに悪くない、かも）

あらかじめ『恋人ごっこ』であり『恋愛ごっこ』なのだと理解しているし、臨也は自分に決して恋などしてないことも知っている。そして自分も臨也に恋していない。

これはバイトでしかなく、つまりお互い演技しているだけだ。彼と恋人同士を演じるだけ。それで、普段の自分では考えられない時給を得ることができる。

「……期限はいつまでですか？」

「俺が飽きるまで。たぶん、そんなに長くはないんじゃないかな」

返ってきた言葉に、だろうな、と思う。何しろお互い男同士、そしてお互い恋していない状態で演技をしているだけだ。そのうち好奇心もつきて飽きるのは道理だった。軽いため息をつく。